

万葉集における『つばき』の表記

市忠頭

万葉集において『つばき』が含まれる
和歌は次の十一首である。(含地名)

54 巨勢山乃列々椿都良々々尔見乍思
奈許湍乃春野乎(坂門人足)

56 河上乃列々椿都良々々尔雖見安可
受巨勢能春野者(春日蔵首老)

73 吾妹子乎早見濱風倭有吾松椿不吹
有勿勤(長皇子)

1262 足病之山海石榴開八峯越鹿待君
之伊波比孀可聞

2951 海石榴市之八十衢尔立平之結紐
乎解卷惜毛

3101 紫者灰指物曾海石榴市之八十街
尔相兒哉誰

3222 三諸者人之守山本邊者馬醉木花
開末邊方椿花開浦妙山曾泣兒守山

4152 奥山之八峯之海石榴都婆良可尔
今日者久良佐祢大夫之徒

4177 「長歌」(前略)八峯尔波霞多奈
婢伎谿敞尔波海石榴花(咲)(後略)

4418 和我可度之可多夜麻都婆伎麻己
等奈礼和我互布礼奈々都知尔於知母加
毛(物部廣足)

4481 安之比奇能夜都乎之都婆吉都
良々々尔美等母安可米也宇惠互家流伎
美(大伴家持)

『つばき』の表記別に集計すると

(1) 椿 四首

(2) 海石榴 五首

(3) 都婆吉 一首

(4) 都婆伎 一首

この様に、万葉集には『つばき』を表すのに、四種類の表記が使われている。2番の『海石榴』が五首で一番多いが、内二首は地名の海石榴市に含まれるもので、純粹のつばきの花として使われたのは三首となる。この表記は当時の中国で日本のつばき（ヤブツバキ）をこの様に表記したのである。3番の『都婆吉』と4番の『都婆伎』は漢字を用いてはいるが、これらは漢字を表音文字として使ったもので仮名表記の一種（万葉仮名）である。これらに対し『椿』の表記は四首に含まれていて、地名を除くと最多となる。この椿は現在私たちが『つばき』を表すのに用いている字である。この字がいつ頃から『つばき』の意味で使われていたかには興味があるが、⁵⁴4番の坂門人足の歌には幸い、『大寶元年辛丑秋九月、太上天皇幸于紀伊國時歌』の題詞が付いているので、作られた年が特定できる。大寶元年（西暦 701 年）9月、持統太上天皇が紀伊国に行幸された時の歌である。従って、8世紀の初めには『つばき』を表すのに『椿』の字が使われていたことが分かる。奈良に都が移ったのが西暦 710 年であるから、奈良時代以前ということになる。かなり古くから『椿』の字が『つばき』の意味で使われていたのである。